

中 学 校

平 成 4 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

教 育 課 題

東 京 都 教 育 委 員 会

平成 4 年度

教育研究員名簿（教育課題）

分科会名	区市町村名	学 校 名	氏 名
進路指導分科会	港	芝浜中学校	風見章
	江東	砂町中学校	○石川美知子
	大田	大森東中学校	市村明義
	世田谷	山崎中学校	伊藤宏昭
	杉並	松の木中学校	橋爪敦
	足立	第十三中学校	菅正
	江戸川	小岩第一中学校	保積良夫
	八王子	館中学校	廣江俊彦
	三鷹	第二中学校	村上太郎
	日野	日野第一中学校	千葉英明
生活指導分科会	墨田	吾嬬第二中学校	五関浩二
	品川	荏原第五中学校	大川博
	中野	第五中学校	島野達夫
	北	王子中学校	◎矢内隆
	練馬	大泉中学校	大町洋
	葛飾	立石中学校	松田公好
	昭島	拝島中学校	末吉雄二
	町田	町田第一中学校	若竹青児
	武蔵村山	第一中学校	岩田重信
	羽村	羽村第一中学校	長谷川幸次

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 山本修次

目 次

I 教育課題部会研究主題設定の理由	2
II 進路指導分科会の研究	3
「主体的な生き方を育てる進路指導の工夫」	
1. 副主題設定の理由	3
2. 研究の方法	3
3. 研究の内容	4
(1) 在校生対象の調査結果	4
(2) 卒業生対象の調査結果	6
(3) 教師対象の調査結果	8
(4) 学級活動における進路指導の展開例	10
(5) 進路指導分科会の研究のまとめ	13
III 生活指導分科会の研究	14
「豊かな社会性を育てる指導のあり方」	
1. 副主題設定の理由	14
2. 研究の方法	14
3. 研究の内容	15
(1) 集団活動についての意識とリーダー資質に関する調査	15
(2) 生活指導の指導実践例	18
① 生徒会役員選挙（A校）	18
② 奉仕的活動（B校）	21
③ 学級活動（C校）	22
(3) 生活指導分科会のまとめ	24

自己の個性・適性を生かし、意欲的に取り組む生徒を育てる指導の工夫

I 主題設定の理由

今日、子供たちが、主体的に取り組む姿勢や積極的に活動する意欲が欠けていると言われている。たとえば、「自分から進んで、仕事を引き受けたり、発言することは少ない。行動を起こすときには、必ずといっていいほど、まわりの友達の様子をみてからにすることが多い。また、自分が困らない限り積極的な行動には出ない。」など、自分の都合のよいことを考えている様子がみられる。

このような状況の中では、生徒は、自分を生かすとか、意欲的に取り組むという気持は育っていないと考える。

この背景には、今日の社会が、抱えている問題が影響していると考えられる。友達と一緒にいる時間の減少、親子の会話不足、テレビ・ファミコンなどの普及などが、子供たちの生活経験の不足をうみ、集団活動における社会性や自主性を育成する上で、憂慮すべきものがある。社会の急激な変化に対応して、自己を高め、たくましく生きることのできる生徒を育成するためには、生徒に社会性を身に付けさせることと、生徒自身が、自分らしく生きようとする力を育てる指導をすることが大切である。

このような視点から、「自己の個性・適性を生かし、意欲的に取り組む生徒を育てる指導の工夫」という主題を設定した。

教育課題部会では、上記の研究主題に迫るために、進路指導分科会と生活指導分科会を設け、それぞれに副主題を設定し、並行して研究を進めることにした。

進路指導分科会では、副主題を「主体的な生き方を育てる進路指導の工夫」と設定した。在校生・卒業生・進路指導主任への調査を基に、進路指導の現状と課題を探るとともに、将来に向っての生き方を考えさせる授業研究を行い、実際の指導のあり方を研究した。

生活指導分科会では副主題を「豊かな社会性を育てる指導のあり方」と設定した。学級活動や生徒会活動などの集団活動についての意識調査を行うとともに、副主題の目標を達成できる指導法のあり方を工夫し、生徒会活動、奉仕活動、学級活動等の実践事例を通して、豊かな社会性を育てる研究実践に取り組むことにした。

Ⅱ 進路指導分科会の研究

進路指導分科会副主題

主体的な生き方を育てる進路指導

1. 副主題設定の理由

今日では、社会の変化に伴って、生活意識や価値観の多様化が顕著になっている。こうした変化の中で、生徒一人一人が自己の能力や適性を適切に把握し、生涯を通じて自己実現を図っていくことが、これまで以上に大切になっている。

しかし、近年の中学生の様子を見ると、将来について、はっきりとした希望や目的がもてず、積極的に学校生活に取り組めない生徒が増加している。一方で自分の進路が偏差値で決まるといった意識の生徒達も少くない。また、教師の指導も各種テストの成績重視、高校のランク付けによる、いわゆる進学指導に偏りがちであることも、否定できない。

このような状況の中で、中学校における進路指導は、これまで以上に生徒一人一人に将来の生き方に関心を持たせ、主体的に生きる姿勢を育てることが重要となっている。

本分科会では進路指導本来のねらいを実現し、生徒一人一人が生き方を考え、適切な進路を選択・決定できる能力を身につけさせることを目指し、上記の副主題を設定した。

2. 研究の方法

中学生は、肉体的にも、精神的にも変化が大きいときである。この時期に進路指導を効果的に行っていくためには、3年間を見通した綿密な計画が必要である。また、その計画に対して教師間の共通理解を深め、適切な指導を行うことが大切である。しかし、現在の進路指導は、高校進学率の増加と共に、進学に偏った指導が中心となり、個々の生徒の能力、適性や進路希望に基づいた指導はあまり行われていないようである。

本分科会では、次のような進め方により研究を行い、現在の進路指導の問題点を明らかにし、効果的な指導の在り方を目指した。

ア 本分科会研究員の所属する学校の在校生、卒業生、地区の進路指導主任を対象に、実態調査を行う。

イ 調査結果をもとに、分析・考察を行い、指導上の問題点を明らかにする。

ウ 研究授業を行い、その結果より効果的な指導法について考える。

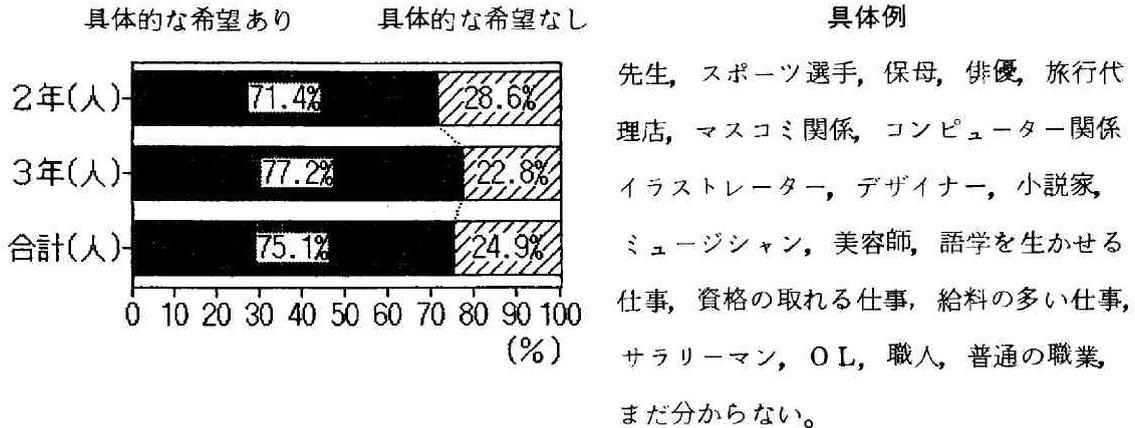
3. 研究の内容

(1) 在校生対象の調査結果

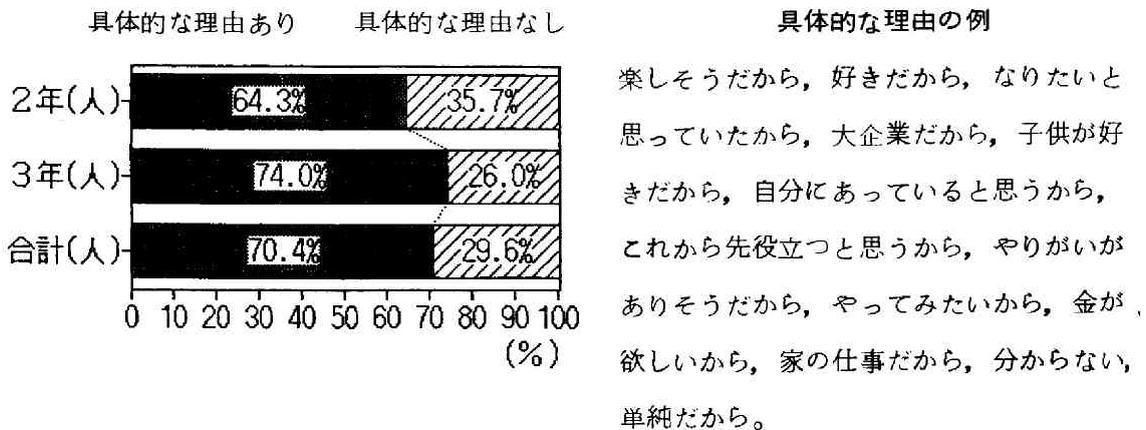
今回の調査は、各教育研究員の所属する中学校の生徒が、自分の進路に対してどのような考えを持っているかを知るために、2年生126名、3年生219名を対象として行った。

設問及び回答

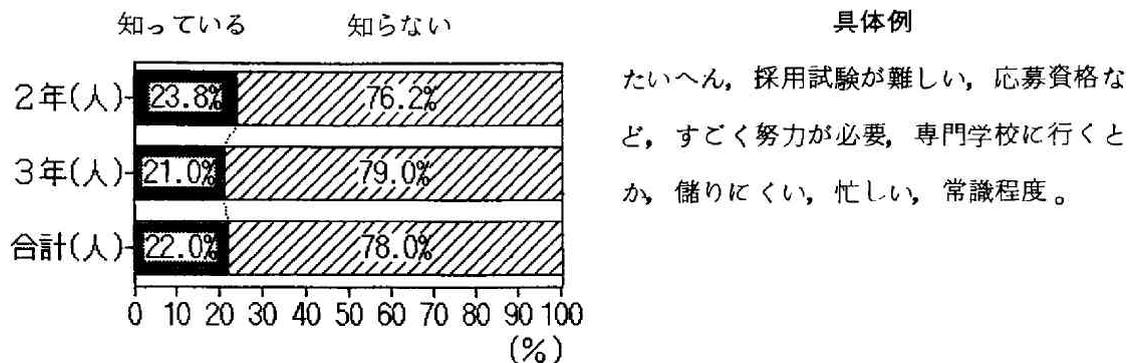
<設問1>「あなたは将来どのような職業につきたいですか。」



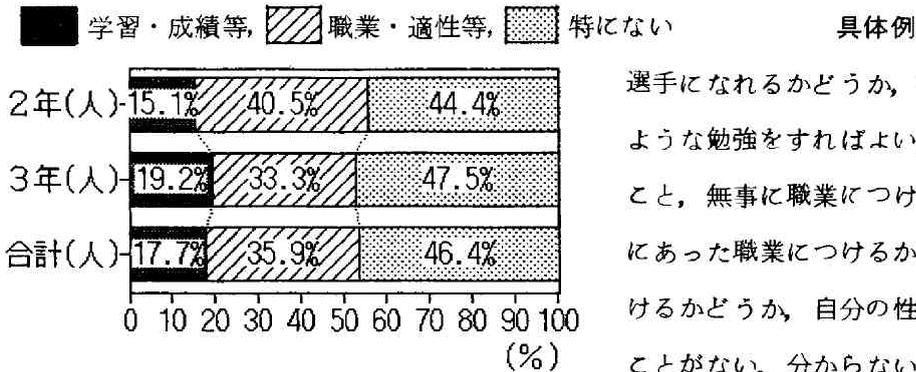
<設問2>「それはどうしてですか。」



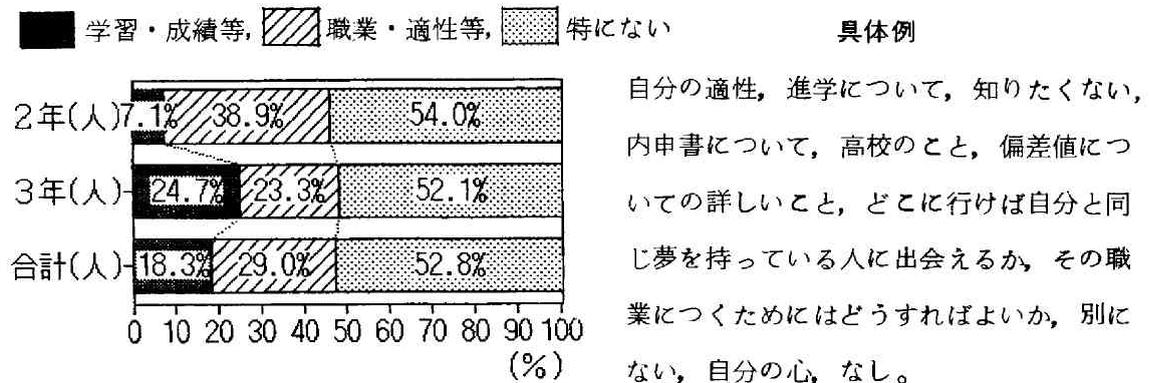
<設問3>「その職業についてどのような情報を知っていますか。」



<設問4>「自分の将来について不安に思っていることはどんなことですか。」



<設問5>「自分で進路を考えていく上で、今何が一番知りたいですか。」



分析及び考察

以上の結果より、我々が考えた以上に多くの生徒が具体的な理由を持ち、将来への職業の希望を抱いていることが分かった。

しかし、具体的に希望を持っている生徒でも、その職業についての情報はほとんど持っていない。それにもかかわらず、自分の将来について何ら不安も抱かずに情報を得ようとする意識さえも弱い。

また、何らかの情報を持っている生徒も、具体例にあげた通りその情報は夢や憧れの域を脱していない。

そして、学年が上がると自分の将来を見すえた進路よりも、学習や成績などの目先のことに目がいってしまう傾向がうかがえる。

そこで、これまで以上に生徒一人一人が将来への関心を持ち、主体的に生きようとする姿勢をもたせる進路指導が重要であり、そのためには、教師が生徒に対して日常の学校生活を通して主体的な行動をおこさせるための動機づけを行う必要があると考える。

(2) 卒業生対象の調査結果

今回の調査は、各教育研究員の所属する中学校を過去一年間に卒業した生徒100名を対象とした。なお、うち99名が高校進学者であった。

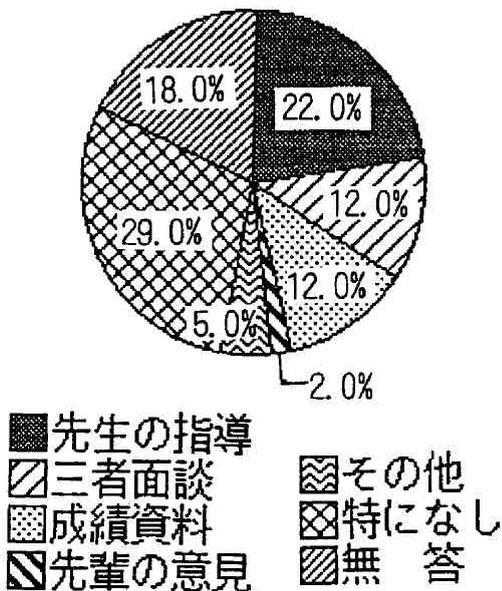
この調査では、卒業生にとって、自分の進路を考える上で、中学校在学中に行われた進路指導のうち、どの内容が重要と受け止められたかを調査した。

設問の内容は、「現在の進路先をどのようにして知ったか」、「現在の進路先を選ぶ上で、中学校の進路指導で特に役に立ったものは何か」、「現在の進路を誰が最終的に決めたか」、「自分の進路選択についての悩みや後悔」などである。

<設問1> 「現在の進路先は、どのようにして知りましたか。(複数回答)」

- ア. 先生からの情報で知った。……………33名
- イ. 親からの情報で知った。……………18名
- ウ. 先輩からの情報で知った。……………10名
- エ. 塾など学校外からの情報で知った。……………11名
- オ. 友達からの情報で知った。……………9名
- カ. 自分で調べて知った。……………32名
- キ. その他……………10名

<設問2> 「現在の進路先を選ぶ上で、中学校の進路指導で何が一番役立ったと思いますか」



回答は記述式のため、その内容の分析を行ったところ、「先生の指導」に関するものが、最も多かった。その中には、「どのような条件に基づいて、進路先を選ぶかを教えてくれたこと。」「落ち着かない心を落ち着かせてくれた。」「いつでも“もう少し頑張ろう”という緊張感を持たせてくれたところ」など、親切な指導に対する感謝の心が随所に見られた。しかし、その一方で、「偏差値」、「内申」など「進学」に直接結び付くような情報を頼りとする傾向も見られた。なお、「特になし」と無回答を合わせると、全体の5割近くを占めていた。

＜設問3＞「現在の進路先を最終的に決めたのは次のどちらですか。」

- ア. 自分の考え 89名
- イ. その他 10名
- ウ. 無回答 1名

「自分の考え」と回答した生徒の中にも、「とても悩んだ。疲れた。」などの添え書きがなされている場合があった。「その他」と回答した生徒では、「親の意見」などの記入が見られ、中には、「入るところが、そこしかをかった。」などの記述もあった。

＜設問4＞「あなたは自分の進路選択で、ア 良かった、満足している点があったら記述してください。イ 悩んだり、後悔していることがあったら記入してください。」

アの満足点に関する回答には、「成績が参考になった。」、「大学受験のための勉強する環境がとても良い。」、「就職するための資格が取得できる。」、「自分に合う学校だと思って大変満足しています。」、「毎日の学校生活がとても楽しい。」などの記述があった。一方、イの悩みや後悔に関する回答では、「進学先に対する情報不足（規則、設備、交通など）」を挙げる生徒が目立ち、さらに「第一志望を受けてみたかった。」、「（高校での）勉強が大変」、「大学に行けそうもない。」などの記述や、中には「やっぱり義務教育ではないので、自分自身の行動にもっと責任をもたなければと考えさせられることが何回かあった。」などの上級学校での戸惑いを記する生徒もいた。

考察

卒業生の意識の上では、進路決定に関して約3割が先生からの情報を頼みとし、自分で調べたという約3割の生徒も、追跡調査をしてみると、先生の指導・個別面談を重要視していることが分かった。教師の果たす役割の大きさを再認識させられることである。また、業者テスト（偏差値）に基づく進路相談も多大な影響を及ぼしている。最終決断を自分で行ったと考える生徒も、結局は偏差値重視の選択と言わざるを得ない。進路先での満足感も、合格できたことでのそれであり、せいぜいその先の進学・就職への有利・不利を感じる程度の意識しか育っていない。そのことは、悩みや後悔にもつながり、進学に対する安易な考え方が読み取れる。中学生でも、より将来を考えた、主体的に生きようとする態度の育成に、重点を置き、進路指導全体の充実を図る必要がある。

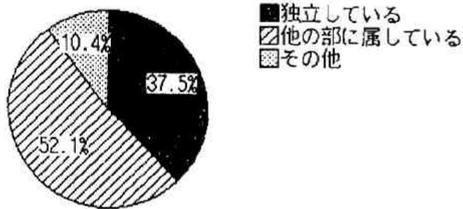
(3) 教師対象の調査結果

各学校では、どのような体制で進路指導を行っているのか、また指導上の問題点はどこにあるのかなど現状を把握し、在校生及び卒業生対象の調査によって得られた結果との関連を探るため、研究員の所属する学校を含めた50校の進路指導主任を対象にアンケート調査を行い48校から回答を得た。なお、回答に当たっては複数回答も可とした。

設問及び回答

<設問1> 「進路指導部は、校務分掌ではどのような位置づけになっていますか。」

進路指導部の校務分掌上の位置付け



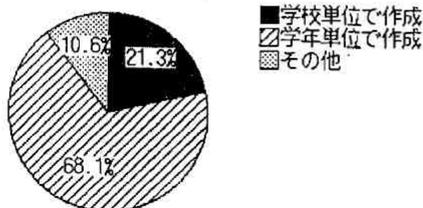
進路指導部として独立しているのは18校で、あとは何らかの分掌と兼ねている。さらに、学級経営部、特別委員会として等の回答とともに、特別に位置づけされていない、といった回答も2校あった。また、具体的な問題点としては、「独立しているが人数不足のため他の部とのかけもち」「名目上存在するが、実際は教務部である」「人数の関係でその年により変わる」「事実上学年または学年ごとの指導になっている」などがあつた。

この設問に付随して「進路指導に関する部会は定期的には開かれていますか」という問に対しては、「不定期ではあるが開催している」が21校でもっとも多かったが、「特に開かれない」も18校あつた。定期的には開かれていると回答した学校が9校あつたがそのうち3校は学期に1回程度の開催であつた。これに関する具体的な問題点としては、「進学指導時期に該当学年を中心に開催するのみ」「分掌部会が重なる」「計画通りにはいかない」「学校としての流れが不明確」「学年間の連携がまったくない」などの記述があつた。

この設問に付随して「進路指導に関する部会は定期的には開かれていますか」という問に対しては、「不定期ではあるが開催している」が21校でもっとも多かったが、「特に開かれない」も18校あつた。定期的には開かれていると回答した学校が9校あつたがそのうち3校は学期に1回程度の開催であつた。これに関する具体的な問題点としては、「進学指導時期に該当学年を中心に開催するのみ」「分掌部会が重なる」「計画通りにはいかない」「学校としての流れが不明確」「学年間の連携がまったくない」などの記述があつた。

<設問2> 「進路に関する年間指導計画はどのように作成されていますか。」

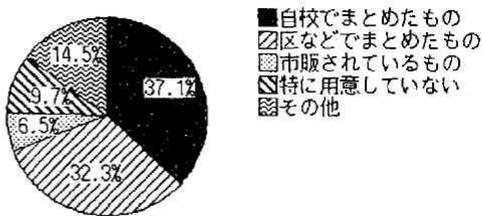
年間進路指導計画の立案



学年別に担当部門で作成している学校がもっとも多く32校であつた。これに関しては、「全校的・系統的ではない」「場当たりの」「全学年を通して作成しているが実際は学年実施」「学年で勝手に指導計画が変更されている」「進学指導のみに傾きがちである」などの問題点が指摘されている。

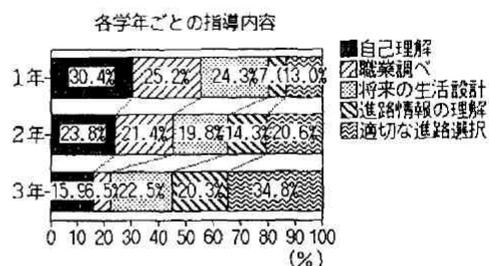
<設問3> 「進路指導教材はどのようにしていますか。」

進路指導教材の作成



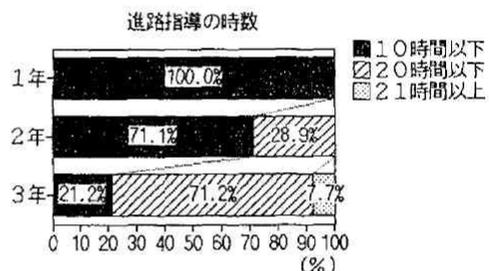
自校でまとめた教材を使用するなど、各校独自に教材の開発に努力している様子が顕著にあらわれており、「市販されているものを利用する」や「特に用意していない」は少数である。また、問題点についても「資料の数が少なく限られている」といった教材開発上の問題が指摘されていた。

<設問4> 「各学年でどのような進路指導を行っていますか。」



低学年から高学年になるにしたがい、指導の中心が基本的な「進路適性の吟味」や「望ましい職業観の育成」といったものから、より現実的な「進路情報の理解」や「適切な進路選択」へと移行していく様子が顕著にあらわれていた。

<設問5> 「各学年どの位の割合で進路指導の授業を行っていますか。」



第一学年の指導時数の内訳をみると5時間以下がさらに全体の半数を占めていた。学年進行に伴う指導時数の著しい増加と、設問4の結果を合わせ見ると、進路指導の主要な力点が、進学指導に向けられていると考えざるを得ない。

<設問6> 「現在の進路指導で問題点と思われるものは何ですか。」

「進学指導中心」「学年色が強い」「業者テストの取扱い」「進路=進学といった風潮」「時間不足」「受験制度のあり方」「教員の研修不足」「正しい職業観・勤労観の育成」「学力の低い生徒の進路」「塾の影響」「親子の価値観の相違」「学級担任の意識の差」等。

考察

以上の結果より、進路指導を行う上での問題点の把握、教材開発、指導時数の確保など進路指導の取り組みへの努力はなされているといえよう。にもかかわらず、校内における進路指導の位置付けの不明確さ、3カ年を見通した指導計画の不在といった問題、さらには人手不足、多忙、世間一般における進路=進学といった風潮などの要因とあいまって、結局、進路指導が進学指導に追われてしまい、生き方を考えるといった一歩踏み込んだ指導にまで至らない傾向が見られた。

(4) 学級活動における進路指導の展開例

① 学習指導案

ア. 対象 第2学年

イ. 題材 「生き方」を考えさせる進路指導

ウ. 題材設定の理由

進路指導においては進学指導に偏りがちになる現状を考えてみると様々な問題点が浮かび上ってくる。

そこで、生徒に進学のみにとらわれず「生きる」ための目標を一人一人が持つことが出来るための動機づけが必要と考えた。そのためには主体的に生きるという視点から人間としての「生き方」を考えさせ、自己の内面から啓発させることを目的としてこの題材を設定した。

エ. 指導目標

人間としての「生き方」を考えさせ、進路選択の一助とさせる。

オ. 教材 東京都教育委員会編 平成3年度版

わが青春の記録 一定時制・通信制高校生の生活体験一

・学ぶ心 松本和子

カ. 教材観

著者の「生き方」を通して主体的に生きることの意味を考え、将来の自分の「生き方」についての自覚を深める。

キ. 指導計画(3時間扱い)

1 時間目

- 1年生の時行った職業調べを思い起こさせ、そこから何を学んだか確認する。
- 在校生対象に行った進路意識調査アンケートをもとに、自分の「生き方」を考えさせる。
- アンケートについての感想をまとめ、次時発表させることを知らせる。

2 時間目(本時)

本時のねらい 教材を通し、将来への「生き方」を考えさせる。

- 班で前時の課題を発表させる。
- 「学ぶ心」を紹介し、感想を各自まとめる。
- 班で感想を発表し合う。
- 班での意見、感想を学級全体に紹介する。

3 時間目

- 自分が望ましいとする「生き方」を考えさせる。
- これからの将来への「生き方」について、今どんな努力をしなくてはならないかを考えさせる。

ク. 指導の展開

過 程	学 習 活 動	指導上の留意点
活動の導入	<ul style="list-style-type: none"> •前時の復習をする。 •本時の学習内容を知る。 	
活動の展開	<ul style="list-style-type: none"> •各自が書いて来た課題を、班の中で発表し合う。 •各班ごとの意見を班長より全体に紹介する。 •「学ぶ心」の朗読を聞く。 •各自の意見感想を用紙に記入する。 •班形態になり各自の意見感想を述べ合い、それを各自短冊に大きく記入する。 •班長が班員の短冊を黒板に貼り、話し合った内容や、各人の意見を紹介する。 •お互いの意見についての感想や質問を述べさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> •事前に班長に司会の方法を指導しておく。 •生徒3名に朗読させる。 •質問項目のある感想用紙を配布する。 •6班体形 •まとめるのではなく、他の人の考えを知る事を目的とさせる。 •学級委員に全体の進行をさせる。
活動のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> •担任の感想、次時の取組みについての説明を聞く。 	

ケ. 評価の観点

- 進路を考える上で、「主体的に生きる」意味が分かり、自分の「生き方」を考えたい目標が持てるようになったか。
- 生徒が自主的に話し合いを進められたか。

②授業後の考察

ア 生徒の感想

在校生対象の調査結果を見て

- A 君－将来の希望について答えたものは、たぶんその人の夢だと思う。だってその職業について具体的なこと知らない人多すぎるから。
- Bさん－自分を含めて、あまり将来のことを本気で考えている人は少ないと思う。はっきり言って、この年令で将来のことを尋ねられてもただ単に興味があるものや憧れを答えてしまうと思います。だから早く自分の適性を知りたいです。
- 「学ぶ心」について
- C 君－自分の身近にこのような人がいたら「あの人、あんな年なのに…」とってしまうだろうが少し考え方を改めて見たいと思う。
- Dさん－私がこの人の立場だったら、まわりがみんな若いのに一人だけ年をとって嫌です。
- E 君－主人公の人が他人なら構わないけど、知り合いだったら絶対に恥ずかしいからやめて欲しい。でも、自分の「生き方」を持ってるのは素晴らしいと思います。
- Gさん－主人公はとても勇気がある人で素晴らしい。このような人がいると頼もしくて、自分にも何か力のようなものが、あふれてくるような感じがした。

イ 今後の課題

今回の授業を行い感じたことは、ほとんどの生徒が真剣に考えていたが自分の「生き方」にまで結び付けられず、遠い世界の他人話のようなものに受け取っている部分もあった。

生徒一人一人が自分の将来についての「生き方」を考えさせる指導には様々な方法が考えられるが、常に目先のことにとらわれない指導の工夫が必要である。そのためには教材の吟味や指導時期、そして指導計画を考慮する必要がある。また「生き方」を考えさせるためには進路指導のみならず、教材での授業や特別活動においても取り組むことが必要ではないだろうか、今後の課題と考えたい。

(5) 進路指導分科会の研究のまとめ

進路指導分科会で実施した、進路にかかわる質問紙調査の結果、次のようなことがわかった。

①在校生対象の調査より、

ア. 多くの子供たちが将来への夢や希望を持ってはいるが、それに関する情報は乏しく、なおかつ、それを知ろうとする意識も弱いこと。イ. 学年が上がるにつれて、自分の将来を見すえた進路よりも、目先の進学にとらわれてしまう傾向があること。

②卒業生対象の調査より、

ア. 業者テスト『偏差値』に基づく進路指導が、やはり多大な影響を生徒に及ぼしていること。イ. 進路先での悩みについても、上級学校への進学や就職への有利・不利といったものであり、より将来を考え、主体的に生きようとする態度が身に付いていないこと。

③教師対象の調査より、

ア. 校内における進路指導の位置付けの不明確さ。イ. 3カ年を見通した指導計画の欠如。ウ. 進学を中心とした指導が行われ、生き方を考えるといった一歩踏み込んだ指導に至っていないこと。

以上のような、進路指導をめぐる、様々な課題があることが、分かった。今、一番必要なことは、人間の『生き方』について、内面的な自覚を深めることである。多くの意見の出るなかで、我々はこの点について再認識し、その、啓発的な指導を試みた。

教材として使用した手記に対し、生徒は色々な意見を寄せた。「自分の人生に悔いを残したくないと思うなら、この様な生き方も一つの方法だと思います。でも私は学生のうちにきちんと勉強し、大人になったらそれを生かすような生き方をしたいです。やっぱり、その時その時やるべきことはきちんとこなしていくことが大事だし、それが一番身に付く方法だと思います。しかし、この人は偉いと思います。この意欲はすごいと思いました。」と、というような、まじめな感想が、クラスの大多数の感想であった。このことより、『自分の生き方を考えさせる授業』を推進することが、これから益々図られなければならないことを、我々は、あらためて確認した。今後の研究の課題としては、①『生き方の指導』を指導計画の中で、どう位置づけるか。②どの時期にやるか。③何時間で行うか。④『生き方の指導』に関する教材の開発。といったことが考えられる。そしてそれらを学年・学校の組織的な取り組みの中で実施してゆくことが大切になってこよう。我々は、その入口にしか到達できなかった。

これからの教育実践の中で深めていきたいものと考えている。

Ⅲ 生活指導分科会の研究

生活指導分科会副主題

豊かな社会性を育てる指導のあり方

1. 副主題設定の理由

生活指導において、個性の伸長は、生徒を個々ばらばらの存在にするというのではなく、それぞれが自己の特性を生かしながら、集団や社会を構成する良き一員として、集団生活や社会生活を円滑に進めていけるような資質や能力・態度を育てていくことが大切であると思われる。研究主題である「自己の個性・適性を生かし意欲的に取り組むための指導」も集団の中でのことと考える。しかし、今日の中学生の実態をみると、集団の中で自分が主体的に、しかも他とともに活動に取り組むことができない生徒が増加していると思われる。自分が集団の中でどんな役割を果たし、他にどのような働きかけをするかを学ぶ経験が不足しているからだと思われる。そこで、生活指導部会では、生徒の社会性を豊かにする活動に取り組みさせることにより、一人一人の生徒が、いろいろな場面において、個性を生かすとともにリーダー性を発揮し、意欲的に活動に取り組むと考え、本副主題を設定した。

2. 研究の方法

(1) 基本的な考え方

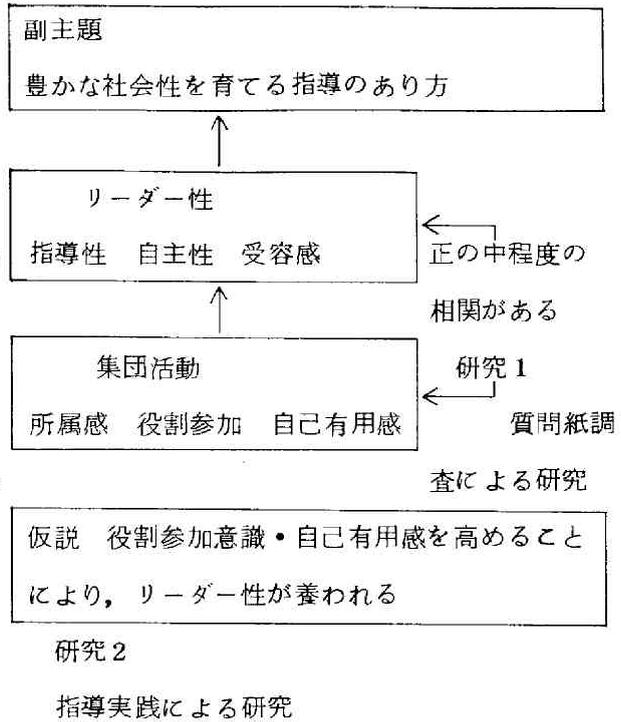
社会性の概念規定は 健全育成推進資料
さまざまに考えられているが、東京都教育委員会は右のようにおさえている。
このうち、私たちは、「集団活動」に着目して研究していくことにした。その根拠として次のようなことがあげられる。集団を学級を例にして考えると、リーダーの存在は学級経営に大きな影響を及ぼす。しかし、リーダーは能力的な要因によるものと思われているが、一方、教師の学級の指導法にも起因するものであると思われる。そこで、集団活動を構成する内容項目とリーダーの資質の関連を調査し、そこから個々の生徒のリーダー性を引き出し、育てる学級経営の基本条件を見付けられるのではないかと考えた。

社会性の概念	各概念を構成する内容項目
基本的な生活習慣	身の自立 計画的な生活 基本的な礼儀作法
対人関係	信頼感 コミュニケーション能力 相互啓発
集団活動	所属感 役割参加 自己有用感
規範意識	自己コントロール 自己決定 ルールの尊重
社会生活	社会の一員 環境へのかかわり 社会参加

(2) 研究計画

- [5・6月] 質問紙調査の内容の検討
- [7月] 質問紙調査を実施
 研究員所属校の10校
 各学年2学級対象
- [8月] 研究1 - 質問紙調査の結果の分析と考察
 指導実践例の検討
- [9月] 指導実践の開始
- [10月] 研究2 - 指導実践の成果の分析
- [11月] まとめ

研究の構想図



3. 研究の内容

(1) 集団活動についての意識とリーダー資質に関する調査

① 質問紙調査のねらい

質問紙調査では、集団活動の内容項目、所属感（集団の一員としての自覚がもてる）役割参加（集団活動に積極的に参加し、役割を果たすことができる）自己有用感（集団の中で自己が役立つ）について、生徒の意識の実態を調査する。また、リーダー資質である、受容感（他を受け入れどう生かすか考える）自主性（自ら進んで判断し行動する）指導性（他に働きかけ集団をまとめる）についても、その意識の実態を調査する。さらに、集団活動の内容項目とリーダー資質の内容項目の相関についても調査した。

NO	質問項目	内容項目
1	あなたは、全体の立場に立って考える方ですか。	リーダー資質
2	あなたは、みんなの意向をよく聞こうとする方ですか。	
3	あなたは、みんなの先頭に立って仕事をしていますか。	
4	あなたは、自分の仕事を責任を持ってしていますか。	
5	あなたは、みんなに協力してもらうために、工夫する方ですか。	
6	あなたは、みんなに助け合うように呼びかける方ですか。	
7	あなたは、学級のいろいろな問題に対して、学級の目標や様子を考えながら解決しようとしていますか。	
1	あなたは、学級が行事で優秀な成績を修めたときうれいしいですか。	所属感
2	あなたは、自分の学級の悪口を言われたときくやしいですか。	
3	あなたは、自分の学級が汚れていた場合は気になる方ですか。	
4	あなたは、自分の学級にいると気が休まりますか。	受容感
5	あなたは、自分の学級にいると楽しく感じますか。	
6	あなたは、自分の学級の人は協力的でクラスとしてまとまりがあると思いますか。	
7	あなたは、学級内にいじめがあると何とかしなければならぬと思いますか。	団
8	あなたは、学級内の人で、きまり違反ばかりしている人を見ると腹が立ちますか。	
9	あなたは、自分の失敗で学級のみんなに迷惑をかけたしまったときすまないと思いますか。	

② 質問紙調査の内容

質問紙調査の項目は、右の表の通りである。

これについて、次の4件法で回答させた。

1	「いいえ」
2	「どちらかといえばいいえ」
3	「どちらかといえばはい」
4	「はい」

③ 質問紙調査の結果とその考察

ア. 平均値から見い出されること。

各質問項目に対する4つの回答番号をそのまま点数とし、その平均値を求めた。

さらに、その平均値を内容項目ごとにまとめまたその平均値を算出した。中央値は2.5であるから、それより平均値が高い場合は、全体として意識が高いということが分かる。

しかし、平均値から計り知れない特徴もあると考え、相対度数の分布も調べ、参考とすることにした。

- 3学年とも学級に対する所属感は強い。
「学級が行事で優秀な成績を収めたときうれい」では、9割が肯定的な回答をしている。

- 役割参加については、平均値からその特徴は把めないが、各質問の回答の相対度数から次のようなことがわかった。「自分の係の仕事をしっかりやっている」と答えた生徒は8割いるが、「仕事分担を進んで引き受ける」、「仕事は進んで実行する」では、否定的な回答が6割いることから、自分の仕事は責任をもつが、自ら進んで仕事をするのは苦手であることが分かる。

- 自己有用感は学年が上がる程弱くなっている。相対度数からは次のようなことがわかった。「学級の役にたいたい」と思っている生徒は7割、「係の仕事をしてよかった」と回答した生徒は6割に対して、「学級内で頼りにされている」や「係等の仕事で先生や

10	あなたは、自分の係（又は委員など）をきちんとやっていると思いますか。	役 割 参 加	活 動
11	あなたは、他の係や委員などに協力的な方だと思いますか。		
12	あなたは、話し合いの時は、友だちの意見などをきちんと聞こうとしていますか。		
13	あなたは、行事などで仕事の分担をするとき、進んで引き受けますか。		
14	あなたは、自分の仕事については先生から言われなくても進んで実行する方ですか。		
15	あなたは、学級のみんで決めた目標について、努力しようとする方ですか。		
16	あなたは、清掃当番などの当番活動では進んで自分の仕事をやっている方だと思いますか。	自 己 有 用 感	
17	あなたは、学級内で頼りにされている方だと思いますか。		
18	あなたは、話し合いの時に積極的に発言しますか。		
19	あなたは、自分の係の仕事で先生や学級の仲間から感謝されたことがありますか。		
20	あなたは、自分の係の仕事をしていてよかったと思っことがありますか。		
21	あなたは、学級で困ったことが起きたときは何とかしたいと思う方ですか。		
22	あなたは、自分に合った仕事を引き受けていると思っていますか。		
23	あなたは、クラスの役に立ちたいと思うことがありますか。		

各内容項目ごとの平均値

分類項目	1年	2年	3年	
集 団 生 活	所属感 (0.46)	3.1 (0.52)	3.0 (0.48)	2.9 (0.48)
	役割参加 (0.51)	2.6 (0.58)	2.6 (0.53)	2.5 (0.53)
	自己有用感 (0.57)	2.7 (0.62)	2.5 (0.61)	2.4 (0.61)
リ ー ダ ー 性	受容感 (0.57)	2.6 (0.66)	2.5 (0.66)	2.6 (0.66)
	自主性 (0.57)	2.5 (0.66)	2.5 (0.70)	2.4 (0.70)
	指導性 (0.61)	2.3 (0.65)	2.3 (0.66)	2.2 (0.66)

()は標準偏差

仲間から感謝された」と回答した生徒は3割であった。つまり、学級の役に立ちたい気持ちと、仕事をした満足感はあるが、それを認められたり、頼りにされた体験はあまりない。

- リーダー資質の中では、特に指導性が弱い。「先頭に立って仕事をする」や「みんなに呼びかける」と回答した生徒は3割である。

イ. 集団活動の内容項目とリーダー性の内容項目の相関から見い出されること

- 所属感とリーダー資質の相関は全体としてあまりない。ただし、その中で所属感と指導性については、学年が上がる程高くなっている。
- 役割参加とリーダー資質の相関は、中程度にある。特に、自主性との相関が強く、また、指導性との相関は、1年生だけ他学年より低い。
- 自己有用感とリーダー資質については、指導性との中程度の相関がある。また、自主性については、学年が高まる程相関が強くなってきている。

分類項目		受容感	自主性	指導性	
集団活動	所属感	1年	0.34	0.33	0.38
		2年	0.28	0.33	0.43
		3年	0.34	0.24	0.46
	役割参加	1年	0.47	0.56	0.44
		2年	0.47	0.55	0.53
		3年	0.41	0.53	0.55
	自己有用感	1年	0.35	0.40	0.52
		2年	0.34	0.46	0.46
		3年	0.43	0.52	0.54

相関係数の信頼性の基準は、すべて1%水準で有意であった。

考察

平均値と相対度数の分布から、今日の中学生は、すすんで仕事分担を引き受けたり、先頭に立って仕事をするのは苦手であることがわかった。

それは、自分のやった仕事で、学級内で頼りにされたり、先生や仲間から感謝される体験が少なく、そのことが自分の考えや行動の自信につながらないためと思われる。

このことは、集団活動とリーダー資質の相関からもわかる。自己有用感とリーダー資質の相関は、学年が高くなるほど強まる。それは、集団活動を積み重ねるほど、自己有用感から自主性が生まれてくるためと思われる。また、役割参加とリーダー資質の相関では、1年生だけが低い。これは、中学校における集団活動の不足から、自分がどのような役割を果たし、どのような働きかけをしたらよいか分からないのではと思われる。

相関の数値の目安

- 0.2～0.4 相関があまりない
- 0.4～0.6 中程度の相関がある
- 0.6～0.8 強い相関がある

④ 質問紙調査からの提言

質問紙調査の結果より、今日の中学生は、リーダー性が不足しており、その不足を補うためには、自己有用感と役割参加の意識を高めることが必要であると考えます。

そこで、私たちは様々な場面の、役割参加の意識や自己有用感を高められる集団活動を工夫し実施することにした。その具体例として次のような活動を考えた。

ア. 生徒会選挙の取り組み、(学年集団の場で、リーダー選出を通して)

イ. 奉仕活動の取り組み、(地域社会の場で、清掃活動を通して)

ウ. 学級活動の取り組み、(学級集団の場で、班活動を通して)

(2) 生活指導の指導実践例

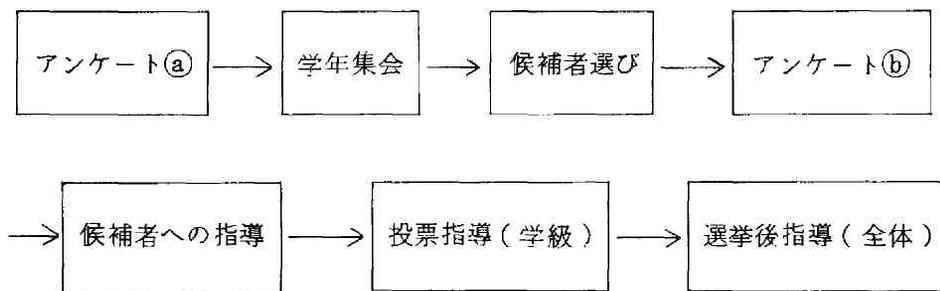
① 生徒会役員選挙(A校)

ア ねらい

リーダーの育成と、望ましいリーダーを選べる集団の育成を図る。

方法としてアンケートをとり、役割参加の意識を高めるとともに指導に生かす。

イ 指導の経過



- この指導は2年生を対象に行った。比較するため3年生の一部にアンケートをとった。
- 学年集会は1, 2年生合同で本部役員から「生徒会の役割」について聞いた。
- 候補者選びはアンケート①の集計結果を基に学級で呼びかけた。
- 候補者へはアンケート①の結果を基に「自分の主張」づくりを指導した。
- アンケート②の結果を基に「リーダー10ヶ条」を学級委員会で作成し、投票に向けての指導に活用した。
- 選挙後「リーダーへの協力」ということで、委員会などへの積極的参加を呼びかけた。

〔アンケートの内容とねらい〕

アンケート①「生活の見直しアンケート」…生徒会への興味・関心を高めさせることを目的に、自分の学校生活を見直させる。立候補者が主張を考えさせる材料にする。

対象……2年生7クラス(240名) 3年生2クラス(73名)とした。

内容……「授業」「クラブ・部活」「クラス」「校則」「生徒会」「行事」の項目別に質問し、回答は4件法で□-ハイ ■-ややハイ ▨-ややイイエ ▩-イイエとした質問の一部を紹介すると、

- 生徒会活動に関心がありますか？
- 役員選挙に関心がありますか？
- 投票するとき、何を基準で人を選びますか？ 具体的に書いて下さい。

アンケート②「理想のリーダー像アンケート」…投票の基準を考えさせる。立候補者への意識づけをねらう。「リーダーの条件を書きなさい」という内容で出した。

ウ 生徒の様子 アンケート①の結果と事後に実施したアンケートの結果の比較

生徒会への関心度 (事前)

2年生	10	44	112	70
3年生	6	9	37	19

生徒会への関心度 (事後)

2年生	27	58	84	69
3年生	9	14	27	22

※ 2年、3年ともに生徒会への関心度は低い。

選挙への関心度 (事前)

2年生	14	42	106	74
3年生	4	16	33	21

選挙への関心度 (事後)

2年生	51	93	61	33
3年生	9	26	22	14

〔投票する際に何を基準にするか？〕

しっかりとした基準(立候補のやる気、信頼感、責任感、主張など)を持っている者とそうでない者(なんとなく投票する)の比較をグラフにした。

投票の基準（事前）

2年生	165	75
3年生	51	22

投票の基準（事後）

2年生	193	45
3年生	55	19

▨→前向きな基準があり

■→前向きな基準がなし（含む無回答）

※ 事後のアンケートは生徒の意識がどう変化したかを見るため、アンケート①の内容と同じものを生徒会関係にしぼってとった。

エ 指導の評価

- 当初立候補を考えていた者が4名だったが、結果7名が立候補した。この中で当選した者が3名だった。落選した者は後期学級委員に3名が立候補して活躍している。
- 立候補者選出に当たっては、生徒会活動の大切さ、2年生がその中心になって学校生活全体を引っ張っていく必要がある事を話した。その際、アンケート①の結果を基に現在の学校生活を見直させたのが役立った。
- 当初の選挙への関心度に比べ事後の関心度が大幅に伸びた原因は、立候補者数15名と例年のない盛り上がりがあった事と、選挙活動がしっかりしていた事が上げられる。
- 投票前指導としてアンケート②の結果を基に学級委員会で作った「リーダー10ヶ条」が投票の基準を考える上で役立ったようである。
- 選挙後朝礼で新本部役員認定の際、全体に「自分たちが選んだリーダーに次はどう協力していけば良いか」という話をした。具体的には、後期委員会や学級活動への積極的な参加を期待したいと話した。また事後のアン

本部役員への協力感

アンケートで「あなたは新役員に協力しますか」という質問をした。右がその回答である。後期委員選出は、どのクラスもスムーズに進み、立候補でほとんど決まった。

44	114	60	27	2年生
12	29	27	22	3年生

オ まとめと今後の課題

今回の生徒会役員選挙指導は、生徒にとって生徒会が学校生活の基盤になるという意識を高めさせることによって、それぞれが自分の役割を意識させることをねらいとした。その役割参加の意識が、立候補につながるとともに、自分たちの代表を選ぶという意識の高揚につ

ながつたと評価できる。

今回は、2年生に指導のポイントを置いたが、来年は3年生を含めた指導の流れを考えに置いて実践していきたい。

② 奉仕的活動（B校）

ア ねらい

自分の住む地域への奉仕的活動を通して、地域の一員としての自覚を高め、地域の声を知らせることにより、自分の活動が役立っていることの喜びを知り、さらに役立とうとする意欲を持たせる。

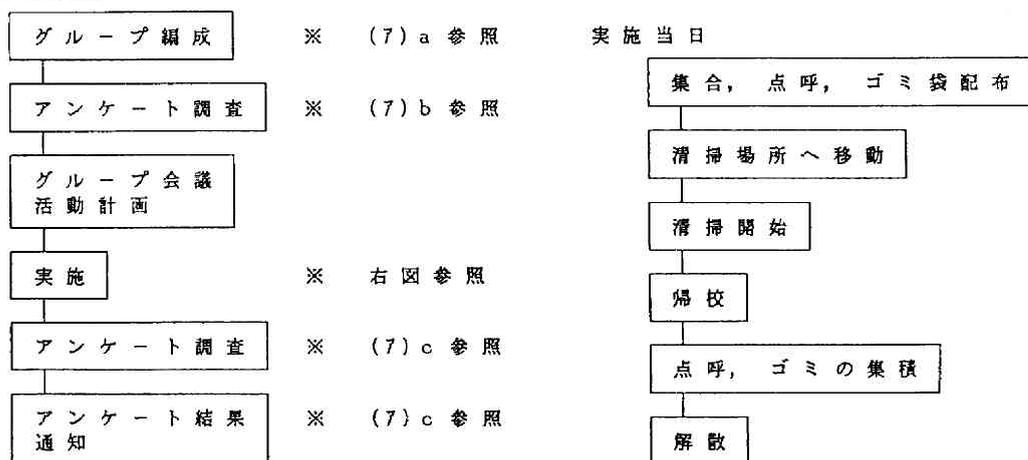
イ 実践内容

㌠ 特徴

- a 避難訓練などで集団下校をするためのために編成した班（学年を越えて近所に住む生徒で編成）を基本に、10名前後のグループに分け、自宅近辺の清掃活動をする。
- b 事前に、地域を対象にアンケート調査を実施し、清掃場所、清掃方法についての意見を求め、これを元に活動計画を立てさせる。
- c 事後にも地域対象のアンケート調査を実施し、地域の方の反応などを集約して、学年通信などを通して生徒及びその保護者に知らせる。

※ アンケート調査は、生徒1名につき約10枚のアンケート用紙を配布し、自宅近辺に配るよう指示した。

㌡ 実践過程



㌢ 実践結果

a 生徒の感想文より

- こんなに町が汚れているのにびっくりした。しらんぷりしていたのが不思議だった。前

よりきれいになって気持ちよかった。(男子)

- 公園にきていた子供連れの人が「ありがとう。きれいになってよかったね」と言ってくれて、とてもうれしかった。(男子)
- 駅の周りがとてもきれいになった。でも次の日にはたくさんの吸いごらが落ちていて少し残念だった。掃除をしているときに「どうもありがとう。ご苦労様。」って言われたときは、本当にうれしかったです。(女子)
- 空き缶がたくさん捨てられていた。ほくもたまにゴミを捨てるので、以降絶対にゴミを道路に捨てるのはやめようと思った。(男子)

b 事後アンケートより(地域の方の意見)

- 照れくさいようでしたが、何か少しでも役立てたという喜びの心が生まれたと思います。
- ○○付近を通りましたら、とてもきれいに清掃されていました。本当にご苦労様でした。
- 見ていてとても気持ちがよかったです。このような活動を続けてほしいと思います。
- 私も提案した手前気になりましたので、私の提案した○○に向かいましたら、どこもきれいに清掃されておりましたので嬉しく思いました。
- 二日後、清掃を希望した場所を通りました。思わず「きれいになったわ」と口に出るほどでした。本当にご苦労さまでした。

(c) まとめ

地域の方から直接感謝の言葉を頂いた経験をはじめ、自分たちのしたことに対する良い評価を知ることは、「自己有用感」を高める大きな手助けとなり得たと思われる。

事実、生徒の感想にもあるように、地域の一員として地域のために自分にできることを考えたり、地域を汚さないように気を付けようとするなどの心情の変化がみられた。

③ 学級活動(C校)

ア ねらい

班活動を中心として役割を分担し責任を持って果たすことにより、集団の一員としての自覚を持ち、所属感や連帯感の高まりとリーダーの育成による学級づくりをめざす。

イ 内容

学級の全員が必ず仕事を分担し、責任を持って行う。

学級集団を高めるために班組織を作る。

学級会・班長会・班会議を中心として学級目標が守れるよう協力する。

㌦ 学級目標

学校生活の向上, 教室等の美化, 学力向上, 学級・生徒会で決定したことの実行

㌧ 組織

1. 学級会 2. 班長会 3. 班会議 4. 生活係 5. 図書係 6. 整美係
7. 保健係 8. 放送係 9. 配布係 10. 掲示係 11. 教科係

㌨ 特色ある班活動

- 学級を6班に分け、清掃班(教室・廊下・トイレ) 給食班・評価班・下校班を一週ずつ分担, 活動する。
- 班は班長・副班長・各係で班員を構成し活動する。また, 班ノートを書く。
- 班長は主に責任を持って行動し, 班の取りまとめや学級全体の仕事をする。また班長会に出席し学級のためにどのようにしたら良い学級ができるか, その方法の原案をつくり, 率先垂範する。
- 班会議は担任・学級会・班長会で話し合った活動討議内容について話し合い, より良い班とする。

2-5 通信 No.6 5月17日(火)

2年5組は いいクラス?

先日5号について 班ノートを載せます。今回は 2班の 係長と式係(副)の 5組についての感想です。

5月13日(金)
5組について
2年5組は 素晴らしいクラスだと思う。
みんな 一生懸命に頑張っていて、とてもいい感じ。
5組には 素晴らしいところがあり、それは...
行事に 参加するだけでなく、文芸活動も...
スに 頑張っている。みんな 一生懸命に...
みんな 班長に 協力していることだ。
5組のみんなが、みんなと協力して、自分たち...
で、頑張っているようにしたい。

エ. 取り組み

㌦ 組織の一員として班活動を徹底する。(役割参加を高める)

- 評価班の結果を班新聞(毎週月～水に書き掲示)にて報告
- 担任による学級通信にて評価し, 励ます。

㌧ 班員一人一人の協力度の評価。(所属感を深める)

- 授業の取り組み(特に実技教科の男女の協力)ができたか。
- 給食当番(協力して配膳・片付け)ができたか。
- 清掃当番(時間内, サボらずに)できたか。などを項目ごとにチェックし, 点数化して評価する。

2-5 通信 No.10 5月13日(火)

班活動 各班の反省

項目	項目	各班				
		1班	2班	3班	4班	5班
授業	授業中お互いに声をかけ、授業に集中できているか。	0	3	1	0	0
	先生の話を最後までしっかりと聞いているか。	2	4	2	3	4
清掃	班長は 班員と協力して清掃に注意しているか。	0	1	0	0	0
	清掃当番は 協力してやっているか。	6	5	5	2	6
給食	給食当番は 協力してやっているか。	5	5	1	6	5
	清掃当番は 協力してやっているか。	5	5	3	4	5
給食	給食当番は 協力してやっているか。	6	5	4	5	7
	配膳・片付けが終わった後、机の上を綺麗にしているか。	4	2	2	1	5
その他	給食・授業以外の時間、班員が協力しているか。	2	2	2	1	2
	班ノートは きちんと書かれているか。	0	5	1	1	0
その他	班員間の協力関係は 協力してやっているか。	3	5	1	5	4
	合計	33	42	22	28	38

オ. 経過

- 5月の生徒会役員選挙で学級から4人立候補する。
- 6月の体育祭で学級一丸となり積極的に参加した。
- 7月より文化祭に向けて学級演劇に取り組む。

カ まとめ

班活動を活発化させることでリーダーが育ち、自主的な行動力へつながり、行動に積極的に参加するようになった。生徒に意欲的に活動する場面と機会を与えれば、自ら役割を自覚し、より良い学級づくりに取り組む力をつけることができることが分かった。

4. 生活指導分科会の研究のまとめと今後の課題

「集団活動と生徒のリーダー性の関連」についての調査研究の結果、集団活動の中で特に役割参加意識を高めることがリーダー性の育成に大きく関与していることが分かった。同時に、自分が集団の中でどのように役立っているかという意識（自己有用感）を高めることにより、役割参加意識がいっそう高まり、一人一人の生徒が自己の個性・適性を生かしながら意欲的に活動する集団が育成されることが確認された。

また、前記の実践例以外にも「豊かな情操と思いやりの心を育む栽培体験学習」「生徒が主体的に企画・運営する生徒会活動」等の実践例を検討した結果、次のような点に留意して積極的に指導をしていくことが「豊かな社会性を育てる」ことに結び付いていくと考える。

- (1) 従来の学級活動や学校行事の中で、一人一人の生徒が自らの役割を自覚し、意欲的に活動しているかを見直し、学校が充実した生活の場となるよう工夫する。
- (2) 生徒の興味・関心・意欲を把握し、一人一人の生徒が目標を持ち、主体的に参加できる場面や機会を設定する。
- (3) 社会や地域の期待を的確に把握し、生徒にとってやりがいのある活動を設定して、多角的で肯定的な評価をすることにより自分の価値に気付かせ、一人一人の生徒のやる気を引き出す。

今回の研究では、一人一人の生徒をどのように集団に関わらせていけば豊かな社会性が育つかに焦点を当てたが、同時に、集団の目標を明確にすることにより、集団が生徒の相互理解や協調性、活動性を高めていくことも分かってきた。また、教師が一人一人の生徒に深く関わり、組織的に連携して指導に当たることが大切であることも確認された。

そこで、次の3点を今後の課題とした。

- (1) 各学校で行われる集団活動を上記(1)～(3)の観点から計画的、系統的に整理する。
- (2) 教師の指導体制を整備し、一人一人の生徒の可能性を伸ばす指導を行う。
- (3) 目標ある集団づくりに努め、集団の力を有効に活用する。